

*すみません どなたで
すか

米

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したらゲームの世界だった…とってたんだよ、ついこの間までは!!

この物語は、原作知識を持つ転生系女子がやんちゃ盛りの可愛い従妹と共に、愛と勇氣を胸に地下をうろつく話である。

『すみません、どなたですか?』

『なんで別人なんだよ!!?』

『嘘だろ…アナタだけが変わってないって信じてたのに』

『助けてFrieもんく!…エツ、そんな冷たい目で見ないで泣いちゃう』

…訂正。これは全く役に立たないうる覚えの原作知識を持って挑む、地下世界の住民との交流記録である。

『決意はできたか？…私はできてないよ！なんだこの世界バグってる!!?』

※このあらすじはフィクションです。恐らく実在するもの殆ど全てに関係ないので作中に登場するかもわかりません

見切り発車。原作未プレイは回れ右。原作及びキャラ崩壊が無理な方も回れ右。更新不定期

目次

P r o l o g u e

【START】

R u i n s

1.	遺跡の歩き方	10
2.	遺跡の進み方	19
3.	遺跡の謎	29

れなかった。子供が1人行方不明でも自分の子じやないから関係ないってか。ふざけるなよ。

ああ、頼れない大人しかないなら…幼い従妹の手助けをするのは誰なんだろうか。

◇◇◇◇

今、私はF r i s kと一緒にいた。穴の底で。

(ツ―従妹見捨てるとか罪悪感で死ぬわ!!でも着いてきても死ぬかもねヤツタア!)

「な、なんか荒ぶってるけど大丈夫…?」

F r i s kが不審者を見るかのような目で見てくる…私のハートに3のダメージ!!

『あー、ごめんF r i。ちよつと混乱してた…』

「まさか山の地下にこんなところがあるとは思わなかったもんね。お花きれいだし、世話もされてるみたい。誰か住んでるのかな」

いや違うんだ、私はキミについてきたばかりに死にたくないなーって思つて…最低だな私!ごめん、ごめんよF r i s k、私、この腐った根性を叩きなおすために一回ゲムオーバーしてくるわ!たぶん残機1だから2度目はないけど!!来世で会おうぜ!

と、さすがにそれは冗談で。

心の中で Frisk に土下座し謝りつつ、顔に出さないように会話を続ける。

ポーカーフェイスを忘れるなってヤツだ。なんで今ポーカーフェイスしてるのかは自分でもよくわからないけど、多分ポーカーフェイスをしろって神が言ったんだろう。

『足跡もあるからナニカが住んでる、もしくは住んでいたのは間違いないよ』

「あー足跡こつちに向かつてるみたい…行ってみよう！」

何がいるかわからないだろうに、この子は勇敢なのか無茶なのか…やはり着いてきてよかつたかもしれない。死ぬかもしれないけどな！

明らかに知性ある生物が作ったとみられる階段を登り、先へ進むと。

「やあー僕は Flowey、お花の Flowey だよ！」

花が現れた。某黄色い花だ、間違いない。ハウディ!!

あー、2次創作のようにいい花だったら良いけど…“LOVE”を集めるとか、“なかよしカプセル”と称した白い塊を私たちに向けている時点で結果はわかつたようなものだ。

でも、誰が何をしようと絶対に私は Frisk の かわいい従妹 LOVE をあげさせるつもりはない。

絶対止めるさ…たとえ画面の向こうにいるアナタが相手でもね ……

小さな決心を胸に、花に相對する。

「なかよしカプセル」にLOVEが入ってるから全てキミのソウルで受け止めてね！」

『Fri…私は今から代々受け継がれし最終奥義を使う』

「最終奥義？」

昔のお偉いさんは言った…

『逃げるんだよおおおおお!!』

…三十六計逃げるに如かず、と！

Friiskを抱えて走り出す。叫ぶ必要はなかったかもしれないと叫んでから気づいた。次から気をつけよう。

「…へえ！キミは知ってるんだ。9人目のニンゲンを見るのは初めてかと思っただけ、もしかして2回目？」

「追いかけてくる」なかよしカプセル”から無言で逃げ回る。

攻撃してくるやつと言葉なんか無視だ無視！

…ごめんFri、そんな咎めるような目で私を見つめないで!!めっちゃ罪悪感にさいなまれる！

「無視かよ…まあ2回目な訳ないよね、僕の記憶にはないし。地上で僕の…ニンゲンを

殺したとかいうモンスターの噂でも聞いた？でも残念！たといえ知識があろうが簡単には逃げられませーん！」

『っあ……！』

いくらFriskが年の割に小さいとはいえ、私もそこまで背は高くない。私は抱えて走るなどという普段はしない芸当と、なれぬ足場に足を取られ転倒した。

転んだのは大きなミスだけど、とっさにFriskを庇えたのはナイスだ私！

「残念だったね……この世界は殺るか殺られるか。逃げるなんて選択肢は……無いんだよ」

Floweyの放った攻撃が迫る。

え、もう人生終了？
Game over

……そんなのお断りだ。

死んでたまるか、命を燃やせええええ!!と必死に避ける。

避けるためにFriskを抱えて転がり回る私は、はたから見ると結構愉快だったのかもしれない。芋虫みたいだって笑われた。許さんズ。

足音と声が聞こえる。

誰か来たのか！地面に倒れているのでよく見えないが女性の声だ。気のせいだろうか、怒っているような…？

声が聞こえた一瞬後。横から飛んできた焔の球が Flowey を吹き飛ばす。チラリと見えた Flowey は、心なしか青ざめていたように見えた。

そうか、次に現れるモンスターはママ！ヤギのマツマだ！モンスターペアレント!!
最後にゲームをやったのももう何年も前なので忘れていた。

「何をやってるの？罪もない者相手に…！」

焔の飛んできた方向にいたのは…

『に、人間————っ』

「え？ニンゲン…？よくわからないけど大丈夫かしら？怪我は、ああ、膝を擦りむいてるわ！服も泥だらけ…まったく、年頃の女の子に！これをお食べなさい」

ここにはいないはずの、人間が立っていた。

モンスターじゃない…だ、と…？

幻覚だろうか…？彼女はどこから取り出したのか、チョコレート差し出している。ブランドものだ。

「り、Ris…大丈夫？」

とりあえずチョコレートを受け取ると、私が叫んだせいか Risk が怪訝な顔をし

ていた。

『私の頭は大丈夫だよ……ごめんね急に叫んで』

「いや頭は元から大丈夫じゃないからいいんだけど……その、チョコ」

従妹が塩対応でお姉さん悲しいです。

先ほどFlowyに襲われたせいで警戒している様子のRiskをよそに、封を開けてチョコレートを食べればあら不思議。

「け、怪我が……?」

「……この食べ物是不思議な力があつて傷を治すことができるのよ、坊や。どうやらあなたのお姉さんは知ってたみたいだけど」

『い、いや……まさかこんなふうに治るとは思つてなかった、です』

怪我はみるみるうちに、逆再生のように消え去り、膝にはかすかに血が付着しているだけだった。本当にゲームみたいに消え去るんだ……魔法の力なんだろうか? 驚きのあまり敬語が抜けかけた。

相手は年上だつていうのに……って、それよりこの人は誰? このタイミングで来るのはTorielしかありえないと思うけど、目の前にいるのはどうみても人間だ。ゲームでのTorielはたしかヤギのモンスターだった。

『チョコレートをありがとう。私はRiskです。あの、あなたは……?』

「私は Toriel。今日みたいに遺跡にニンゲンが落ちてこないか見回っているのよ」

ヘーイ!? マツマ擬人化ツ!!?

なんてことだ…擬人化って…ここは2次創作の世界だったのか!!

でも Flowey は花だったけど、そこは変わらないのね?? はたして原作通り黄色い花の Flowey となぜか擬人化の Toriel、どっちが例外なんだろう。

他のモンスターもニンゲンになっっているのだろうか。もし人間になっっていると言うならば…人間のソウルを探したり、落ちてきたニンゲンを殺したりはしていないのだろうか。

私や Risk が死ぬ危険性はないかも…?

「…Risk、Risk y!! 聞いている?」

あまりの衝撃に固まっているうちに、Risk と Toriel さんとで自己紹介が終わっていたらしい。Risk が私を呼んでいたようだが、まったく聞いていなかった。

『ごめん、なに?』

「家に案内してくれるんだって」

『家? あ、マツマ…ごほんつ、Toriel さんの?』

「マ……うん。今日の天気予報雨だったから心配だったけど、濡れなくて済むね！」
『……あー、Fri。地下、というか洞窟に雨は降らないよ』

…雪は降るんだけどね、という言葉を飲み込んでツッコむ。しまった、と顔を赤らめ
恥ずかしがる私の従妹が今日もこんなに可愛い。

*周囲に小さく笑い声が響く…あなたは穏やかな気持ちで満たされた。

R u i n s

1. 遺跡の歩き方

Torieiさんに着いて、遺跡へと向かう。

遺跡の前に何かあったようでFriskが手を伸ばしているけど、よく目を凝らしても、何も見ることはできなかった。セーブポイントでもあったのだろうか？

どこからか決意を抱いたと声が聞こえた気がする。

「Ruinsの歩き方を教えてあげるわね。ここにはパズルがたくさんあるの、昔ながらの気晴らしと鍵の合わせ技」

『気晴らしって…』

「当時は今より娯楽がなかったものだから。それに、侵入者を撃退する昔からの技術でもあるのよ。移動する時は解かないといけないから、よく見て慣れていってね」

そういうとスイッチを踏んでパズルを解いてみせるTorieiさん。

それを見たFriskは何やら考え込んでいるようだ。

「1個目は、左前から順番に右、上、左…うーん。全部覚えなきゃダメなのかな」

いや、確かどこかにパズルのヒントがあったはず……

『あつ、見てF r i i！壁に看板か何かがあるみたい』

「ほんとだ！えつと、

”先へ進みたくば迷いを捨てよ。真の勇者も愚か者も真ん中の道は歩まず”

つてことは……真ん中を歩くことだ!!やった、解けたよ!”

『これなら覚えずに済むね。多分これから先もこんなヒントが書いてあるんじゃないかな』

「あら、気づいた？実は私たちが間違えた選択をしないように書いてあるの。しっかりと考えればちゃんと解けるようにね」

「へえ〜面白い！普段はやらないけど、パズル結構好きになつたかも」

「そう言ってもらえると嬉しいわ！さあ、次の部屋に向かいますよう」

さて、日が暮れる前に遺跡を抜けられるだろうか……とは言っても、基本地下に日は差し込まないから日がくれてもわからないけど。



1つ目のパズルから数分後。私たちの目の前には子供がいた。

また人間…？

「ここでは、出会った相手があなた達を襲ってくることもあるの」

『Flowe y…あの黄色い花のように？』

「…そう。その時のために準備をしておかないと」

「でも武器も持つてないし、戦えないよ」

「心配しないで、あなた達は武器を持つ必要はないの。ただ、相手とおしゃべりすればいいのよ。時間を稼いでくれたら私が仲裁しにいくわ」

まさかこの言葉が後に響くとは、初見じゃわからなかつたよ…。

ところでこの子は誰？なんで人間がここに…。

「この子はDummy。この子と練習してみましようか」

え。

Dummyって確か日本語でマネキンだよな。だがどうみても人間だ。鼻目に
見ても人間だ。しかしながら人間だ…この世界の住人は、人間になっている？

Flowe yは花だったのに。ハブリ？仲間はずれ？ドンマイ黄色い花。

FriskがDummyに近づき、視界が黒く染まる。

《…Dummyに遭遇した》

どうやら音声形式でアナウンスが流れるようで、どこからか声が聞こえる。いきなり

視界が黒く染まり、声が聞こえたので思わず周りを見回してしまった。

「Risk?何かいたの?」

『…いや、なにも。それよりその、ソウルまた出ちゃってるね』

何も浮かばない私とは別に、Riskの胸の前には真つ赤に輝くハートが浮かんでいた。あれがソウル…画面の中の景色はこう見えるのか。

「なんか勝手に出てきちゃうの…ねえ、どうにか出来ないようにできないのかな」

私は知らない。もしかしたら原作でそんな話があったかもしれないが、あいにく何年も前の記憶なので覚えていなかった。TorieさんもRiskのソウルが出ないようにする方法を知らないようだ。無言で首を傾げている。

「そっか…ところで、Dummy?って、何でハテナがついてるんだろう?」

『ん?Riskには何か字が見えるの?』

宙を指差すRisk。その場には何もなかった。

「あれ、Riskには見えないの?よくわかんないけど、文字が書かれた板が浮かんでるよ。ゲームみたい!」

FIGHTとかACT, ITEM, MERCYも書いてある…と左の方から指差している。それじゃあゲームみたいじゃなくて、ゲームそのものじゃないか。

確か原作でも同じようなボタンがあったはずだ。

もしかしたら、Friskはゲームと同じように世界を見ているのかもしれない。ボタンとかセリフとか：昔Frieが描いた絵は綺麗な流線だったので、流石に見えている世界はドット絵じゃないと思うけど。

『じゃあ、声も聞こえる?』

「声って、当たり前じゃん。聞こえなかったらRisと会話できないよ!」

『他の声は?』

「え?他に誰か話してた?聞こえなかった:どうしよう、耳悪くなったのかも」

…アナウンスはFriskに聞こえていない?

Torieeさんの方に顔を向けても、怪訝な顔をされただけだった。私は幻聴でも聞いているのかな…?

「とりあえず何か選ばなきゃ!えっと:どうしよう」

『さつきTorieeさんが行つた通りにすればいいんだよ』

「さつきの…:そつか、おしゃべり!てことはACT!!?」

《:ATK 0、DEF 0》

Friskが選択したことでアナウンスは続いていく。幻聴とは思えない:まるで隣から声が聞こえてるかのようリアルだ。周囲は誰も反応してないけど。

《綿の心臓とボタンの目:だったはず。目に入れても痛くないくらい可愛い》

ACTで”調べる”を選択したようで、Dummyの詳細の音声がかんこえる。

…にしても、アナウンスの声も戸惑っているようだけど、どう見ても綿とボタンでできているようには見えない。目なんか、本物をそっくりそのまま入れたんじゃないかってくらいだ。ガラス玉でもはめ込んだんだらうか。

《Dummyは今にも倒れそうだ》

「えつと、お元気ですか！」

「…」

Dummyは黙り込んでいる。

「きよ、今日はいい天気だね」

《あなたはDummyに話しかけた…ちぐはぐな会話だ》

会話が續いていない…Riskはちよつと落ち込んでるように見えた。

落ち込むRiskとは対照的に背後でTorielさんが喜んでる。話しかけたことを喜んでるんだよね…？Riskが落ち込んでるから喜んでるんじゃないよね？

《あなたは勝利した！0 XPと0 GOLDを得た》

「えつくすぴー？なんだらう、これ」

「！それは…あなたにはきつと関係ないことよ、ぼうや。さあ次へ進みましょう」

TorielさんはEXPを知っている？でも教えたくないようだ。たしか、どれだけ相手を傷つけたかの数値だった気がする…あっているかはわからないけど、とりあえずFriskのEXPが増えないことを祈ろう。

急かすようにして部屋を出て行くTorielさんとそれにつれられ出て行くFrisk。私は1人、部屋に残っていた子供…Dummyと思わしき子供に話しかけていた。

『ねえ、Dummy…さん？』

性別も年齢もわからないのでさん付けでよんでみる。

ちなみに私がFriskに初めて会った時、男の子だと思って「くん」付けで対応したら女の子で平謝りした過去がある。本人は怒るところか楽しそうに笑っていたが…ごめんねFrisk！あんなに可愛いのに間違えて!!私の目は節穴です。

『…』

『キミってモンスターじゃないの？』

『…』

無言だ。話す必要性を感じていないのだろうか。まあ、それでも勝手に続けさせてもらうけど。

『さつきFriskが”調べる”を使った時の話じゃ、綿とボタンでできたマネキンの

はずなのに……どうみても人間だ。Torielさんだつて、たしかヤギか何かのモンスターのはずなのに人間にしか見えない』

「！」

『できれば、理由を知っているなら教えて欲しいんだけど……』

「……」

『無理かな……？』

「……」

少し待ってみたが、教えてはくれないようだ。残念だけど2人を待たせると悪いのであまり追求する時間はない。部屋を出ようと歩きだすと、後ろから小さく声が聞こえた。

「……突然ニンゲンみたいになっただけ。何があつたかなんて知らない」

Dummyだ。

振り返つて見たもののこれ以上話す気は無いようで、そっぽを向いていた。

『突然、人間みたい……？』

もともとは違う姿だったということはわかる。果たしてそれが私の知る、ゲームでのモンスター姿だとは限らないけど。

でも、これの言い方だと、人間じゃないみたいだ。

「…」

返事はない。

私は次の部屋へ進んだ。

*人間にしか見えないDummyを振り返り、あなたは胸に疑問を抱いた。

2. 遺跡の進み方

部屋を出てみると、人っ子一人いない。

『え、置いてかれた？私一人で遺跡を進めど？』

Torieeさんは私を見捨てたの…？

妙に蛇行している白い模様を目を凝らして考え込んでみると、少々人間味の薄い少年が現れた。顔つきが…心なしかカエル似かも？

視界が黒く塗り替わり、独りでに私の足が止まる。

『なっ!?!』

見回してみるが周囲には誰もいない…目の前にいる少年以外は一寸の先も見えない深い闇だ。

私の胸の前にはオレンジ色に光るハートが浮かんでいた。

「げこっげこっ」

『……もしかして、これ、戦闘中？』

Friskの戦闘時には流れていたアナウンスは流れてないし、相手の名前やコメン

トの書かれたボードも出て来ない。MERCYやFIGHTのコマンドもない。

真つ暗な空間で、私はたいして身動きの取れないままに少年と向かい合い…浮かぶ、オレンジ色に光るハートを眺めていた。

おそらくこれは…私のソウルだ。

ソウルはその名の通り魂、血の流れていない心臓のようなものだったはず。普段は肋骨や肉で守られているが外に出たらガードはない。つまり私は今、無防備にも心臓を晒している。

危険度はモンスターの体の脆さとあまり変わらないだろうが、魔法を使えるだけ相手の方が有利に思える。

その不利を覆すため、Friskの場合は、決意が力の源になっているようだけど…オレンジ色のソウルは決意じゃない。

…なんだったつけ？

「げんげん」

急かすような声がする…どうやら私が行動するまで相手も何もできないみたいだ。ていうか普通に少年の声で擬音語を言われると変な気分になる。なんでゲゴゲコ言っているのだろうか？

不思議パワーが働いているのか逃げることもできなかったので、とりあえず話しかけ

てみることにした。先に *F r i s k* が見逃して^{MERCY}いるだろうから私を見逃してもらえない可能性があるし、そもそも武器がないので戦う選択肢はまだない。

『えーっと、こんにちは』

話しかけても少年は首を傾げるだけだった。

F l o w e y の ” なかよしカプセル ” よりも小さい白い粒が飛んでくる。

身動きの取れない私は避けれな…：どうやらコマンドがなくても、自分で何かしらの行動を起こせば次の行動ができるようになるらしい。私は動けるようになっていた。

身体を捻り、自分のソウルを引つ掴んで粒を転がるように避けた。ソウルを掴んだ瞬間、ぞわりと奇妙な感覚が背筋を走る…：ソウルはあまり強く掴まないほうがいいかも。

私に避けられた粒が暗闇の中に溶けていく。どうやら攻撃は終わったようだ。

『この攻撃、もしかして *F r o g*…：なんだっけ？ *F r o g g y*? 違うな…：あつ、*F r o g g i t*? 』

「げこつ…：ぷろギツとー！」

明らかにさつきとは違う反応。見た目の雰囲気から *F r o g g i t* かもしれないとは思ってたけど…：よかった、名前は通じてるみたいだ…：言うか今普通に喋らなかつた

☒

『私は、*R i s k y*。よろしくね』

自分を指差して名乗ってみる。ついでに手も差し伸べて。

「リスキュー？」

『リスキー』

「るすキー」

『…リズ』

「リす」

『リスキー』

「げこげこつ」

名前の発音は諦めることにした。というか相手が諦めた。

ちなみに差し出した手はガン無視。Froggitに握手の文化はないのか？

Froggitが、げこげこ言っている。よく聞くとアクセントに違いがあつて、微妙に間延びしてる時もあるので、もしかしたらFroggit語のようなものかもしれない。出会つて数分で意味を理解することはできなかつたけど。

会話したのに攻撃がこないのでもちらりと周囲を伺うと、いつの間にか周囲は暗闇から元の遺跡の景色に戻っていて、私の前にあつたソウルも消え去っていた。

『MERCYできたんだ…』

「げこつ」

『…えっと、見逃してやるから先に行けるな?』

先に進む道を指差す Froggit。

ジェスチャーから推測して、別れを告げて針だらけの道に進もうとしてみたが、どうやら違ったらしい。

Froggitは私の手を引っ張り、針の道へと進んで行った。先導する Froggitの後に恐る恐る足を踏み出し、針が引っ込んだことに安堵する。正解のルートを教えてくれるみたいだ。

そのまま引つ張られて渡り切り：私はわざと間違えたルートの針をつついて見た。

『…硬い』

足で踏んでいたら危なかったかもしれないけど、つつくぶんには特に影響はなさそうだ。トラップでもあるかと思ったが、これなら木の枝かなにかで足場を確認しながら行けば問題はないかもしれない。手持ちに木の枝はないけど。

考え込んでいると突然 Froggitに白い粒で攻撃された。全然痛くはないが驚いた。どうやら Froggitは私が針山をつついたことを怒っているようだ。

謝って先へ進む。

Froggitは針の道を引き返して行った。

え、着いて来てくれないの!?

「げん」

Fr o g g i t は元いた場所からこつちを見ている。持ち場を離れるわけにはいかないようだ。

別れを惜しみつつ私は先へ進んだ。

◇◇◇◇

長い廊下が続いている。何もない廊下だ。

廊下の端まで行くと、一本だけ不自然に立つ柱の真横にF r i s k がいた。1人で。

「すぐに来るかと思つて待つてたけど、遅すぎだよ！やっぱ置いて行つて先に進んでおけばよかつたかなー」

『なんてこつた、私の親愛なる従妹がこんなに冷たい…！ところでT o r i e l s a n さんは？』

「ママならここで待つててつて言つて先に進んじやつた。何か用事があるみたい」

『…ママ？』

「あ、T o r i がママって呼びたいって言つたらいいって言つてくれたの」

すごい軽いノリで従妹に新しいママが出来てました。

軽いな！

「なんかすごく嬉しそうだっただよ」

『じゃあ私も呼んでみようかな！』

「うーん…喜ぶといいけど」

『それは暗に私が言っても喜ばないかもしれないと…？』

「よし、先に行こう！」

Friskはとてもいい笑顔で前を向いている。え、ちよ、Friskさん？

『否定して？？ていうか待っててって言われたんじゃなかった？』

「いいのいいの、さあ、行くぞー！」

いいのかそれで…お姉ちゃんちよつとキミの未来が不安だよ。

廊下の続く部屋を出ると、Torieさんから電話がかかってきた。

偶然渡された携帯が気になって弄ってたところだったので私が出ると…Torieさんが、もしかして部屋から出たりしてないわよねって…出ちゃったよ。勘が良いなあ、実はカメラで監視してたりしないだろうか。

「あ、Froggitがいる。こんにちはー」

私が電話で対応している間にFriskがカエル似の…Froggitに話しかけ

ていた。

『F r i s kは電話にでんわってか…』

電話の向こうでT o r i e r i eさんがクスクス笑っている。ごめんなさい、寒いですよね！

くつ、私はこんなジョークを言うタイプだっただろうか…？

よく考えてみれば…：ジョークは昔から割と好きだった。F r i s kを笑わせようと引き取った当初はダジャレの連発。懐かしい。どうやら私はジョークを言うタイプだった。

F r o g g i tはやはり人間にみえる。今度のF r o g g i tは先ほどの少年F r o g g i tよりは年上そうだが…少年F r o g g i tと背丈がほとんど変わらない。そういう種族なのかな？

げこげこと言っている…：ジェスチャー的には「ねえねえ」と話しかけている感じだ。

《ちよつと良いかな、人間さん》

今度はアナウンスキターーーッ！

F r i s kと別れる前に流れた声とと同じ声だ！翻訳してくれているらしい、正直助かる。きつと今頃F r i s kの目には同じ内容の書かれたボードが見えていることだろう。相変わらず私には見えないが。

「ところでこのアナウンス…さつきは聞こえなかったのに今は割と近くから聞こえるんだけど、どこから聞こえているんだろう？」

《ACTで特定の行動をとるか FIGHTで相手を弱らせたなら、相手はそれ以上バトルをしたがらなくなるだろう。もしモンスターが戦いを望まなくなったら、どうか…：MERCY、で停戦しておくれ》

「ACTって、さつき出て来た相手についての情報とか話せるやつだよ…：FIGHTはまだ選んだことないなあ」

『選ぶの？』

「ちよつと気になってるけど…まあ、できる限り話してみようかな」

『そっか』

皆殺しとか言わなくてホツとしたよ。

「ねえ、さつきから何やってるの」

『スピーカーを探してる』

アナウンスがどこから聞こえるのか気になって仕方なくて…。

結局、Friskに怒られてスピーカーは見つからぬままに渋々やめた。Friskのいる方から聞こえるんだけどな。

《*戯けてカサカサと木の葉の上を通り あなたは決意で満たされた》

Friskが何を決意したかはわからないけど、私はFriskにバレないようにア
ナウンスの音源を見つけ出すことを決意したよ！

「セーブ、つと。よし、次はこっちの部屋に行ってみよう！」

お、アメの部屋だ。

《「おひとつどうぞ」とある。キャンディーをとる？》

「キャンディー！1個持って行くこうっ」

Friskは歡喜に満ち溢れている。

『じゃあ私は2個もらおう』

「え、おひとつ書いてあるよ？」

『お1つだけとは書いてないからね〜』

「屁理屈言わないで…つて、取っちゃった！チョコレートもまだ残ってるのに…ずるい」

『Friskも取ったら？』

「おひとつ書いてあるから1つでいいもん」

今日も従妹が可愛い。

*嬉しそうな従妹をみて　あなたは慈愛で満たされた。

3. 遺跡の謎

Froggit は種族名なのかもしれない。遺跡を歩いて出くわしたカエル似の老若男女はみんなそろって Froggit だった。

ナキムシやルツクスなどの他モンスター（しかし姿は人間）も兄弟姉妹なのかみんなよく似ているようだった。話し方とかは結構違ってたけど。

『みんな個性的だね…』

「うん！こんな面白い人がたくさんいるって知ってたら、もっと早くここにきてたのに」
『ちよつと Frisk さん？お姉ちゃん、大穴に落ちていくあなたを見て心底心配したんですけど？』

少し責め立てるように言うと、心配してくれてありがとう、と笑顔で言われた。

そう言われたらもう、これ以上責めることはできない。従妹がエンジェル…これはモンスター待った無しですわ。

Frisk にチョロいって言われた。

恐らくきつと私がチョロいなんてことはないと思うけど、Frisk が言うならいいや。と前へと進む。

さて、次のパズルは何のパズルだったツ、えあ!!？

ぼーっとしながら歩いていたら、地面が消えた。

『おち、落ちるうあああああ~~~~ツ!!!』

F r i s k が慌てて手を伸ばすも、届くことはなかった。

受身をする暇もなく背から地に落ちた私に、痛みが襲いかかる……かと思えば。

『まったく痛くない』

体の下にはふわふわと柔らかい感触。

ちやうど私の落下地点に赤い落ち葉が敷き詰められていた。どうやら天然(?)のクッションのようだ。

とりあえず周囲を見渡すと、周囲は狭い部屋になっていて、壁に四角い穴：開いたドアのようなものが2つ見えた。

天井の穴から F r i s k の声が聞こえる。私の安否を聞いているのだろうか。

『私はいじょうぶヘラツ!!』

無事を伝えようと叫んだその瞬間。上から降ってきた何か私を潰した。

痛い、重い！

まるで子供が降ってきたかのような衝撃だ。

「Risk!ご、ごめん。大丈夫?」

『大丈夫だ、問題ない! Riskが羽のように軽いから天使でも舞い降りてきたかと思っただけ!』

私の上にはヨコシマ模様の衣を纏いし天使Friskがいた。

「大変だ…頭を打ったみたい」

『撃たれたのは私の心です』

「近くに病院はあったかな?」

『知覚できる範囲にはなさそうだね』

「うわ寒つ…ん、あれ出口じゃない?」

私がふざけているうちに、Riskも出口らしき暗闇を見つけたらしい。

少し緊張した足取りで壁にぼつかりと空いた2つの四角い暗闇へと向かう。

どっちが出口かなあ、と悩むRisk。

私の背が高ければ肩車で頭上に空いた穴から戻して上げるんだけど…無理なものは仕方がない。

となると問題は、どっちが私たちの落ちた穴の向こうへ繋がっているか。

確か、この暗闇に入れば上の階に戻れるはずだけど…どちらかは穴の手前だ。

穴の手前じゃあ、落っこちた穴を飛び越えなきや行けないし、歩き通しのF r i s kにそんな疲れさせるわけにはいかない。

『よし、ちよつくらやってみるか』

悩むF r i s kを背に、試しに持っていた木の枝を四角い暗闇に突っ込む。右側の、着た方向からいえば進行方向側の穴だ。

うまくいけば枝が上の階に飛んで、落ちる音が聞こえるはず。たぶん音が進行方向側からすればこつちが出口、逆ならもう一つが出口。つまりどっちにいけばいいかわかる寸法だ。

枝先がゆつくりと闇に飲まれ見えなくなったかと思えば……ふ、と目の前が一瞬暗くなる。

あ。



……どうやら枝を持っていた私も一緒に飛ばされるらしい。

先程落ちた穴の下から、F r i s kの叫び声が聞こえる。

直後に目の前の暗闇から飛び出てきたF r i s kに涙目で説教された。

ごめん。誤算だったんだよ、木の枝だけ行くと思ってた…

え、言い訳はいいわけ？

あ、いえ、ごめんなさいなんでも無いです。

最終奥義ジャパニーズ土下座は、何やってるのって冷たい目で流された。

すみませんでしたの意です。すみませんでした。



モンスター飴でご機嫌を伺うことしばらく(受け取ってはもらえなかった)、ようやく涙も引いてきたF r i s kと一緒にパズルを進めていく。

「あ、またパズルがあるよ。岩を動かせばいいみたい」

『私が動かしてみるよ。いい？』

岩を四方から睨み付けるように確認したF r i s kが頷くの待ってから、岩を押す。

『うわあ、凄い重たいなー』

「うわあ凄い嘘っばいなー」

……ちよつと空気を変えようと騙そうとしてみただけどバレた。
残念。

それにしてもこの岩、ほとんど軽石かっつてくらい軽い。けど風で吹つ飛ぶほどでもないし、いったい何岩なんだろうか。

「バレバレだよ！ Risk っつてば演技下手すぎ……うわツ、すごく軽いねこの岩」

『子供でも動かすことができるようにできてるみたい』

「親切だなあ」

騙されはしなかったけど、結果少し Risk の気分が上がつてきたようなのでヨシとする。

スイツチまで岩を移動させると、道を塞いでいた針山が地中に沈んだ。

パズルが元に戻らないうちに先へ進まねば。のんびりしていて元通りになってしまつたら苦勞が水の泡だ……まあ、大して苦勞はしてないが。

道なりに進めば、先ほど見かけたものと同様のヒビが地面を覆っていた。

先ほど……私がやらかして落つこちた時だ。

Risk が私の服の裾を握る。

P
r
r
r

『もしもしTorrieさん?? Friskが可愛すぎるんですけどどうしたらいいですか?』

「え、ちよつと、Ris何電話かけてんの!?!?」

《フフ、そういう時はハグをしてあげるのよ。優しく、ギュッと!》

「ママ!?!?」

来いよ、クレバーに抱きしめてやるぜ……。

フリスクの耳がしばらく真つ赤だったことだけ書き記しておく。

あとなんかTorrieさんから《バタースコッチorシナモン》って聞かれたので、
「シナモン!」

『バタースコッチ!』

って答えておいた。

面倒な答えでごめんよママ。同居してたし従姉妹だけど、別に食の好みは同じじゃ無いんだ……。

さて、ところ変わって落ち葉のベッドなう。

頭上には穴が一つ。

そう、さつき床を埋め尽くすヒビがあると聞いたな？その中の一つに落っこちた。

電話のおかげで緊張もほぐれ、歩き出した一步目で落下した私すごい。F r i s k も最早呆れてた。

その呆れ具合といえば、私が落ち葉の柔らかさを堪能しているうちに、F r i s k l 人で好奇心の赴くまま歩き回るほどである。

さつきまでの怒りとかはどこに……。

「あ、ヒントみーつけー……よし、解けた!!」

どうやらパズルのヒントを見つけたようだ。解くの早いなあ、さすがだぜF r i s k さん。

F r i s k が私を急かし、背後に見える唯一の出口へ向かう。あーあ、せつかくの干草のベッドが!

ていうか私、まだヒント見てなかったんだけどなあ……まあいつか。

唯一の出口は先程と同じ、暗くて奥が見えない構造だ。

そして暗闇に突っ込めばあら不思議。

落ち葉の山へダイブする直前にいた部屋へ、と言うわけだ。

先程の一件がまた尾を引いているのか、F r i s k が私の手を強く握っている。

「手を引っ張るから、R i s は足跡をたどってきてね。一步も間違えちゃダメだよ!手

も離しちゃダメだからね！」

『手を引いて、通る場所も指摘して、いたせりつくせりだね。ヒントは何だったの?』
「だってそうしなきゃ勝手に1人で行っちゃうじゃん!! : ヒントは落ち葉を踏むなって内容だった」

若干トラウマだったらしい。ごめんね。

でもF r i s k が1人で山登って大穴に落ちた時も、私は同じような気分だったことを覚えといてくれ……。

それにしても、落ち葉といえればあの落ち葉はどこから来たのだろうか。

さっきの穴の下にもあつたけど、どちらも周囲に木はない。しかも落ち葉クツションはご丁寧に穴の下のみを敷かれていた。

ということとは、いつの日かどこからか落ち葉を持ってきて敷き詰めてくれた誰かがいたのかな。

穴が空いた時、私は突然すぎて着地体制もろくに取れなかった。

あの落ち葉がなければ、下手したら骨折、少なくとも足が痺れたりアザになったりしたに違いない。きつと無傷とはいかなかったはずだ。

穴があるのを知ってるか、魔法とかが使えれば別だろうけど。

いったい誰が、誰のために落ち葉を敷いたのか——？

*誰がために 落ち葉はあるのか…そう考えたら 不思議なあたたかさで胸が包まれた。